もやもや きりかえて！

不安を、バイバイ！

「豊かなコミュニケーションのために～シンボルでコミュニケーション～」別冊

活用事例集

【要　求】

事例１

児童発達支援センター

３歳児・自閉症

思いがうまく伝えられず要求できない際に、物を投げる等の注意喚起や怒るといった表出を行うお子さんに対して、そのお子さんが、その場面で使用する教具の写真カードを分かりやすように、切り抜き絵にして用意し、要求を促した。欲しい教具の課題を手に取ったり、手でタップしたりして伝えようとする姿が見られ、落ち着いて過ごすことが増えた。

教材

事例２

児童発達支援センター

３歳児・知的障害

有意味語がないお子さん。ご飯を食べるときに、ふりかけを欲しがるが、大きな声を出して訴える。カードをソフトケースに入れ、机上に置き、欲しい時に渡すことを介助して教えてきた。声を出すときに、カードを指さすと渡せるようになり、続けていくことで、指さしをしなくても、自分からカードを差し出し、ふりかけを要求するようになった。

教材

事例３

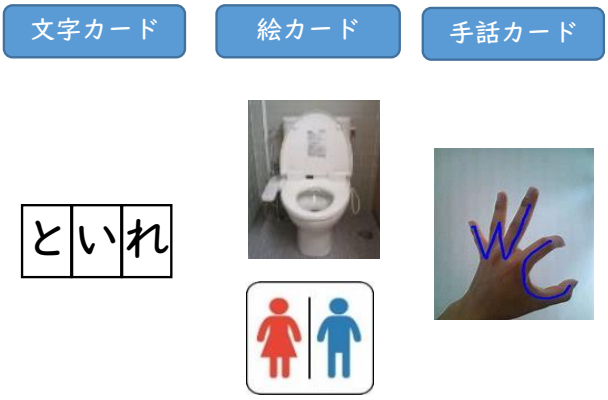
ろう学校

４歳（幼稚部１年）・聴覚障害

手話等の手指言語が未習得でトイレでの排泄ができない幼児に対して、黒板に文字カード・絵カード・手話カードを提示した結果、トイレの絵カードを指さして要求することができるようになった。

教材

文字カード　絵カード　手話カード



事例４

児童発達支援センター

５歳児・自閉症

給食の際におかわりが伝えられず、離席を繰り返したり他のお子さんの食事を取ろうとする様子が見られたため、このお子さんの大好きな白米の写真カードを用意し、担任に伝える練習を行った。その結果、自分から写真カードを担任に渡しおかわりを要求できるようになり、他児の食事を取ろうとする行動がなくなった。また、着席時間も長くなった。

教材

事例５

知的障害特別支援学校

8歳、9歳（小学部2年生、3年生）・自閉症

校内のよく行く「場所写真カードボード」があることで、発語のない複数の児童が、それを用いて休み時間に過ごしたい場所を自己選択・決定をして、担任に要求することや、「〇〇先生はどこにいったの？」の質問に、「ほけんしつ」の写真カードを指さして応答する等、コミュニケーションをとる姿が多く見られるようになった。

教材

ほけんしつ

事例６

知的障害特別支援学校

9歳（小学部3年生）・自閉スペクトラム症

発語がないAさんには好きな遊びがたくさんあります。周囲の人もAさんが楽しそうにする表情が見たくて遊びに誘うのです。ところが、Aさんは好きな遊びに誘われてもつまらなそうにすることも多いのです。Aさんの好きな遊びをカードにして遊具の棚に貼り付けたところ、Aさんはその時遊びたい物（カード）を教員に手渡すようになりました。それ以来、Aさんは毎日休み時間が来るのを楽しみにしています。

教材

事例７

知的障害特別支援学校

10歳（小学部4年生）・自閉症スペクトラム障害

発語は「まま」のみのAさんですが、いろいろなことを知っていて、簡単な言葉の理解もあり、言葉指示で行動できる場面が増えています。ですが、自分から発信できず、要求手段は「指差し」と「具体物を持ってくる」のみでした。給食のおかわりを楽しみにしているAさん。そこでiPadを使用し「えこみゅ」のアプリでおかわりをするときの要求を三語文で伝えることに成功！iPadでその場で写真が撮れ、載せられるので、欲しい物を音声で伝えて要求できるようになりました。主語、名詞、述語の文法理解も育ってきています。

教材

事例８

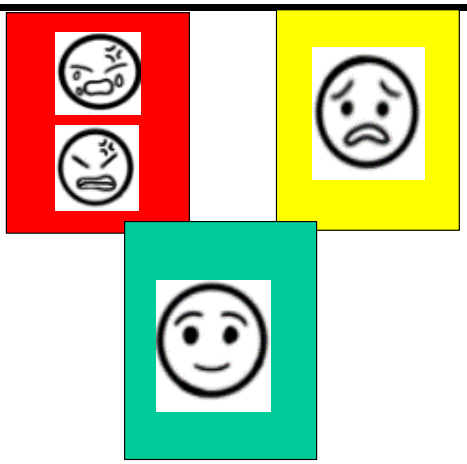
ろう学校

12歳（中学部１年生）・聴覚障害、知的障害、自閉的傾向

『お助けカード』

自分の気持ちをうまく伝えられず、ストレスをためこみ爆発させてしまう生徒に対して、教員が表情やしぐさからパニックにつながる可能性があると感じたときに、黄色カードを提示しクールダウン（休憩）が必要か、本人の気持ちを聞き出す。カードの選択によって、自らクールダウンをすることができた。今後は、自分でカードを提示して、手話の通じない相手にも伝えられるようにしたい。

教材



事例９	肢体不自由特別支援学校	教材
	15歳（中学部3年生）・先天性急性脳症	
発語が難しく、言語理解のある生徒が、自分の要求があるとき、５０音が書かれたカードを使うことで、文字を指差して意思をつたえることができるようになった。		

【拒　否】

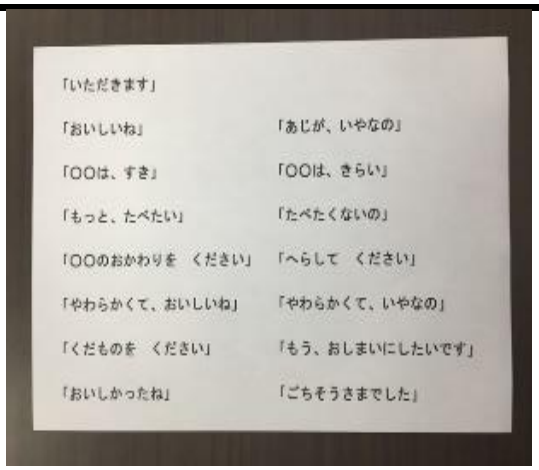
事例１

児童発達支援センター

４歳児・自閉症

食事の好き嫌いが多く、食べたくない食事のお皿を払いのけたり、時にはひっくり返したりしている。２，３語文で話ができるが、ことばで表現することがない、そのために伝えてほしいことを文字で綴った用紙を用意し、本児が拒否の態度を示したときに、そのシートを見せながら、「～は、きらい」「たべたくないの」などの文章を指さしながら、本児に確認して、ことばで文字を読ませるようにしてきた。拒否の態度を示したときや事前にシートを用いながら確認していき、文字を読みながらことばで表現することを促してきた。現在は、食べ進まないときに、机上に置いてあるシートを指さすと、「～たべない」など言うようになっている。

教材



事例２

児童発達支援センター

４歳児・ダウン症

やりたくない時に、離席や違う課題を取りに行く等の行動をとり、自分のルールで動こうとするお子さんに対して、「おしまい(身振り)」のカードを用いて、まず人に嫌だという気持ちを伝えてから行動することを促すようにした。促しは必要だが、やりたくない時に、カードを渡すことへの意識が深まってきた。

教材

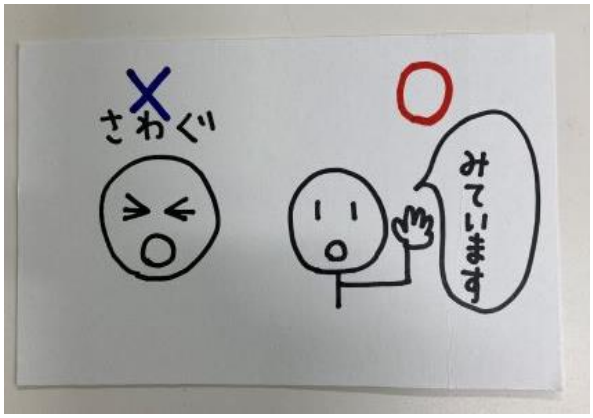
事例３

放課後等デイサービス

6歳児・発達障害

３～4語文で簡単な日常会話ができるお子さんだが、リトミックが嫌いでリトミックの時間になると離席をしたり騒ぐ様子が見られた。ことばでの拒否できることを目標にイラストと絵の描かれたカードを用意した。現在、そのカードを見ながら、「やりません。見ています」と伝える事ができている。

教材



事例４

知的障害特別支援学校

小学部５年・自閉症スペクトラム（発語なし）

発語がない、または限定的な単語しか発しない児童が、今日の給食メニューカードボードを用いて、苦手な食べ物、減らしてほしいメニューを支援者に伝えるようになったり、時間割カードの苦手な「イヤだなあ」と不安になる授業のカードを取り出して裏に貼る等して支援者に伝える等があった。支援者は児童の不安感を知ること・受け止めることができ、無理のない目標設定ができ、頑張りを認めて評価することができるようになる。

教材

【注意喚起】

事例１

児童発達支援センター

３歳児・ダウン症

自発的に物を選択して遊びだすことが少ない児。自発的に選択できるように、大人の介助をいれていくことにした。与えられたパズルをやり終え、周りをキョロキョロ見ているばかりで、なかなか自分から動き出せない。給食の要求で、好きな果物のおかわりをカードで要求することができていたので、「できました」カードをパズルをしている机上に置くことにした。最初は、声掛けをする必要があったが、繰り返して行ううちに、自ら大人に渡せるようになった。気づいた大人は、本児に片付けを促し、次に遊ぶものを一緒に探索するようにした。

教材

事例２

医療型児童発達支援センター（通園部門）

４－５歳児（年中・年長）・肢体不自由(脳性麻痺、他)

通園療育に通う発語・発話のない肢体不自由児に対して、クラスよりも少し小さな（この時は5名の）グループ保育活動でのお当番活動、お名前呼びの場面で使用。クラスでも使用しているお友達を表すマークをVOCA（音声出力コミュニケーションエイド：本事例は”スーパートーカー”）と組み合わせて、マークを狙って押すと「〇〇さん」と呼びかける音声が流れる設定にしました。お当番活動に取り組む意欲、”自分でお友達の名前を呼んだ”という達成感に繋がることを狙っています。(今後はタブレット端末でこのようなセッティングも容易になりそうです)

教材

事例３

療育センター（外来診療部門）

7歳（小学部2年）・肢体不自由（脳性麻痺）

四肢麻痺の為自分から積極的に周囲に働きかけたり、やりとりが成立した経験が少ない。象徴機能の芽生えの時期に入り、絵本「くらいくらい」とVOCA（音声出力コミュニケーションエイド：本事例は”ビッグマック”）を用い、相手を意識しながら自分の役割をもって行動を調整することを促した。本人はボタン押しで「でんきをつけてちょうだい」と周囲に伝える役割、STはそれに応えて電気をつける役割で設定した。はじめは、どんどんと一方的にVOCAを押していたが、そのうち、絵本読みのタイミングに注意を向け、意識してボタン押しのタイミングをはかりながら、やりとりを楽しめるようになってきた。

教材

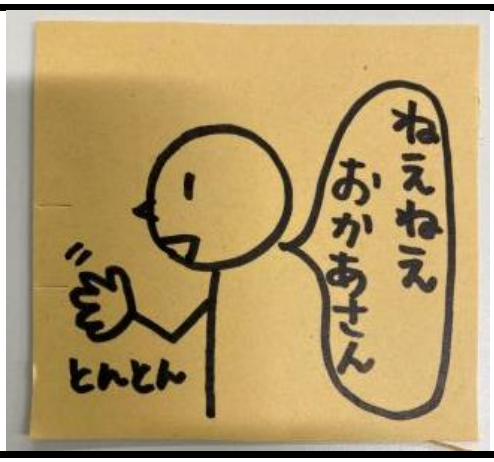
事例４

放課後等デイサービス

9歳児・自閉症

ご家庭において、ことば（単語）で要求や興味ある事について伝えようとする様子が見られるようになったが、ご両親から離れた位置で小声で話すため伝わらないことが多かった。『ねえねえ　おかあさん』と文字とイラストが書かれたカードを見ながら相手を軽く触りながら（腕をトントンする）呼ぶように練習を行った。その結果、最終的にはカードを見なくても、自発的に父母や身近な大人の近くに行き相手の名前を読んで話しかけられるようになった。

教材



【報　告】

事例１

ろう学校

幼稚部１年・聴覚障害

手話での表現より先に、行動が出てしまう幼児に対して、表情入りの絵カードを使用したところ、イライラしたり、モヤモヤしたときは、絵カードの前に行き、今の様子を伝えてくれるようになった。

教材

事例２

児童発達支援センター

５歳児・精神運動発達遅滞

発語はあるが、単語レベルで不明瞭。言語理解は、日常的に使用していることばや文章を理解している。そのため、コミュニケーションブックを使用してやりとりをしている。連休に行った家族旅行の話をブックをみながら行った。どの新幹線で行ったの？誰といったの？何をしたの？などのやりとりが行えた。今日、これからどこに行くの？今日の遊びは楽しかった？何色のクレヨンが欲しいの？など、そのページを見せておくと指さしで教えてくれる。何を聞かれているかの理解、こういうことを答えればいいんだということを促すこともできた。

教材

事例３

放課後等デイサービス

8歳児・自閉症

3語文程度での発語が見られるお子さんだが、プリント学習後、分からない問題がある、あるいはプリントを解き終わったタイミングで、担任を呼ばずに勝手にプリントに落書きをする様子が見られた。「1まいおわったら、せんせいをよぶ」と文字が書かれたカードを机上に常に提示しておくことで、勝手に落書きをせず、担任を呼ぶようになった。

教材

事例４

知的障害特別支援学校

１０歳（小学部４年生）・自閉症

発語がないAさんは自分の心の中を周りの人に伝えることができませんでした。生活に身近な場所や活動、気持ちなどを詰め込んだ冊子を携帯してからは、感じたことを相手に見せて伝えようとするようになりました。単語カードを並べて文を作り、相手に見せる方法で伝えます。最近では帰りの会などで活動の感想を発表し、クラスみんなで共感できるようになりました。

教材

事例５	知的障害特別支援学校	教材
	吃音のある児童や発語のない児童（小学部５，６年生）	
発語はないが、絵カードや文字の理解ができる児童、または緘黙がある児童が、VOCAペンを使用して、自分で朝の会等で今日の予定を発表できる。		

事例６	肢体不自由特別支援学校	教材
	１４歳（中学部２年生）・脳性麻痺	
発語や身体を動かすことが難しく、日中車いすで過ごしている生徒に対して、コミュニケーション能力を高めるねらいの活動で、昨日の夕飯のメニューを相手に伝える場面を設定し、目線の高さに写真カードを２種類提示すると、選びたいカードを凝視し、選ぶことができるようになった。		

事例７	ろう学校	教材
	１５歳（中学部３年）・聴覚障害・知的障害	むずかしい たのしい
手話での表現より先に、行動が出てしまう幼児に対して、表情入りの絵カードを使用したところ、イライラしたり、モヤモヤしたときは、絵カードの前に行き、今の様子を伝えてくれるようになった。		

【理　解】

事例１

児童発達支援センター

３歳児・自閉症

場面や環境によっては行動の調整がまだ難しくなるお子さん。療育前に、廊下を行ったり来たりして激しく走ることが多く、保護者の困り感が強かった。待合で今日行う課題の写真を渡して待っていてもらうことを約束した。本人が好きな粘土だということや、行うことが明確化され、見通しがもてたことで座って待つという行動が形成された。

教材

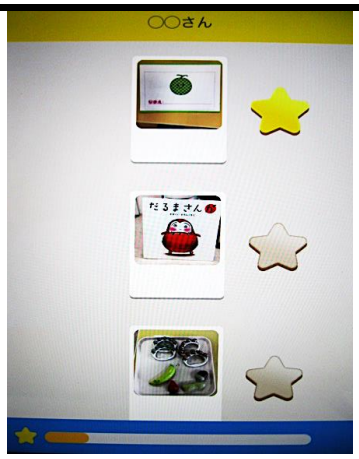
事例２

医療型児童発達支援センター（通園部門）

３歳児（年少）・脳性麻痺の疑い、運動失調

母子分離で保育活動に参加する際、母がいないと不安で泣いたり、頻回に「トイレ」と言って退室することを繰り返していた。そこで、視覚的なスケジュール表を示せるiPadアプリ「やること」を用い、課題がひとつ終了するたびに、リストの最後の枠にある母の写真を呈示し、全体の流れを確認した。すると、母に会えるタイミングを明確に理解できるようになり、見通しをもって安心して保育活動に参加することができるようになった。同時に、各活動の達成感も、達成ボタン（★）を押すことで明確になった。

教材



事例３

児童発達支援センター

５歳児・知的障害

２－３語文の表出がある。要求を伝えたりすることが多いが、一方的に話すことも多く、やりとりにならないこともある。特に、質疑応答では、パターン的な質問（お名前は？　いくつ？）であれば答えることができるが、「だれ？」「どこ？」などの疑問詞の理解は難しく、おうむ返しになることもある。そこで、視覚支援として、カードと身振りを併用して、色々な場面で活用してきた。現在は、「だれ？」「どこ？」と聞いて答えられないときに、カードを指し示すと言えるようになってきている。

教材

事例４

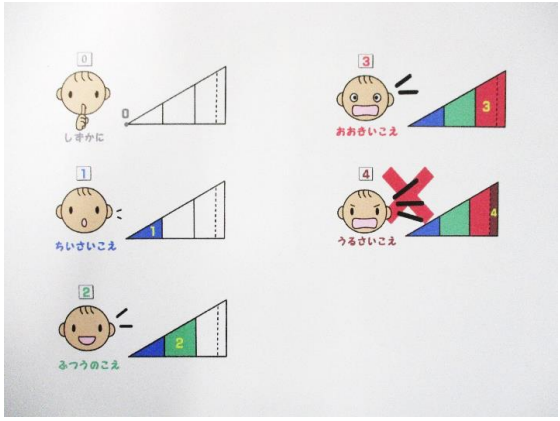
知的障害特別支援学校

６歳（小学部１年生）・自閉症スペクトラム障害

船の汽笛がお気に入りで「おーーーーおーーー！」と大きな声を出して楽しみ、授業中も汽笛の真似をしてしまいます。「声のものさし」を見せて声の大きさの見本を実施して見せ、授業中は「1の声」、あいさつは「2の声」で、カードを指さして伝えたり、指差ししながらその大きさの声で伝えたりすることで、声の大きさを意識することが少しずつできてきました。

急な変化は見られませんが、声の大きさを意識するきっかけになります。

教材



事例５

知的障害特別支援学校

7歳（小学部1年生）・知的障害

授業中の姿勢として、椅子に座って背筋を伸ばして、足を床に付け、手は膝の上に置くといった良い姿勢の取り方を絵と文字で示すことで、すぐにまねをして良い姿勢ができるようになりました。授業の始まりの時にこのカードを示して注意を促し、授業を始めることが多いです。

教材

事例６

知的障害特別支援学校

7歳（小学部1年）・知的障害

着替えをする際に上も下も脱いで、下着の状態になってから着替える児童が多い。小学校にあがった段階で、この手順表を示すことで、自分で絵や文字で確認しながら着替えを進め、上を脱いだら上の服を着る、下を脱いだら下のズボンをはくといった着替えの一連の流れが身につきます。

教材

事例７

知的障害特別支援学校

７歳（小学部１年）・知的障害

終了時刻になってもやっていることがやめられずに、遊び続けてしまう児童に対して、気持ちを切り替えて、次の活動にスムーズに移れるように約束カードを作りました。「タイマーが鳴ったら、今やっていることを片付けて、椅子に座る」という流れを示したカードを見せるようにした結果、活動への切り替えがスムーズになりました。

教材

事例８

視覚障害特別支援学校

7歳（小学部1年生）・視覚障害

Aさんは、人の言う言葉は理解できるのですが、見ることができないため、イメージをはっきりさせることができませんでした。毎日の朝の会ではその日の天気や学習予定を確認する場面があります。天気や状態、授業名を表すシンボルを立体にしてカードにしたところ、Aさんはシンボルに触れてその内容を確かめることができるようになりました。

教材

事例9

知的障害特別支援学校

８-９歳（小学部２，３年）・自閉症

マスク装着に抵抗・拒否感があり、全く着けることができなかった。大好きな場所であるプレイルームの写真カードとマスク装着絵カードをセットで提示し、プレイルームに行くにはマスクを着けることが必要だと伝えたところ、プレイルームに行く時のみ着けられるようになった。場面限定の布マスク着用→日常的に布マスク着用→提示物を不織布実物に変更→日常的に不織布マスク着用と段階を踏んでマスクを着ける習慣が身に付いた。

教材

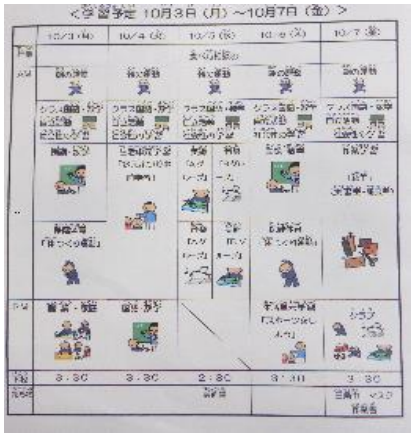
事例10

知的障害特別支援学校

7歳-15歳（小1から中３）・知的障害

学年だよりを2週間に1度、家庭に配布しているが、文字だけでなくイラストも使用している。保護者だけでなく、本人が来週、再来週の予定を見て、どんな授業があるのか見通しをもつことができる。避難訓練や身体計測が事前にいつあるのかを確認することができ、見通しをもって安心して登校することができるようになった。

教材



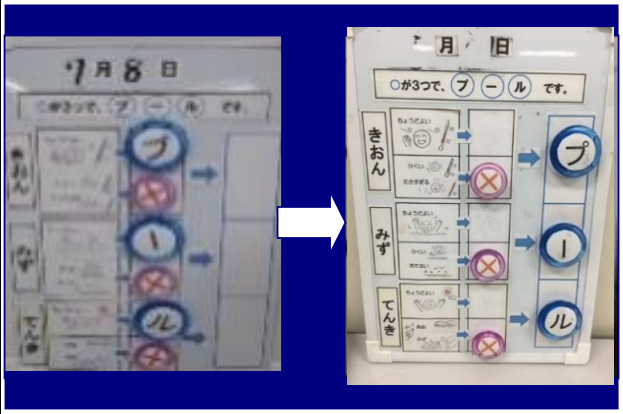
事例11

知的障害特別支援学校

１５歳（中学部３年）・自閉症

水泳を楽しみにしているAさん。ところが気温、水温が整わないとプールに入ることができません。Aさんはこれまでに、水泳が中止になる理由が分からずイライラすることが何度もありました。水泳当日の朝、気温、水温などの条件を視覚的に確認するようにしたところ、中止の事実に納得して受け入れられるようになりました。

教材



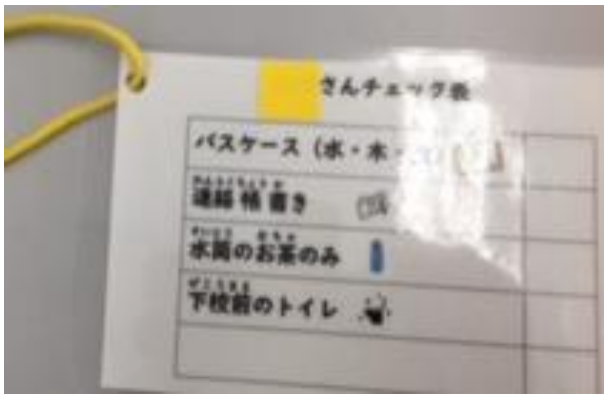
事例12

知的障害特別支援学校

１８歳（高等部３年生）・自閉症

一つひとつの行為は自立しているのですが、下校前にもれなくすべてを行うことが難しいケースです。するべきことを表にして、自分で一つずつ確認しながら進めていくカードを作成しました。文字の他にシンボルを添えてわかりやすくしています。最初は担任が表を提示し、確認しながら取り組み、やがて下校時に自分で表を見ながら、担任の言葉かけを待ったり、頼ったりせず、自分のペースで下校の準備ができるようになりました。一人でできるという自信もつき、自立のための支援具として活用しています。

教材



作成　　２０２３年３月
作成者　コミュニケーションシンボル連携会議
【事務局】
東京都立花畑学園
窓口　進路交流部コーディネーター
住所　〒121-0062　東京都足立区南花畑５－２４－４９
電話　０３－３８８３－７２２０